

Rintaro Azusa  
梓林太郎

# 吉野山 常念岳 殺人回廊

TOXIMA NO MEI (書下) 殺害三回廊 (ミステリー)







TOKUMA NOVELS

梓林太郎

吉野山・常念岳殺人回廊  
じょうねんだけ

発行者 徳間康快

発行所 徳間書店

東京都港区東新橋一ノ二六 一〇五八〇五五

電話〇三・三五七三・〇一一

振替〇〇一四〇〇一四四三九二

©Rintarô Azusa 2000 Printed in Japan

落丁・乱丁はおとりかえいたします

編集担当 国田昌子／販売担当 山田章治・益子 光

ISBN4-19-850491-1

書下し長篇山岳ミステリー

# 吉野山・常念岳殺人回廊

## 梓林太郎



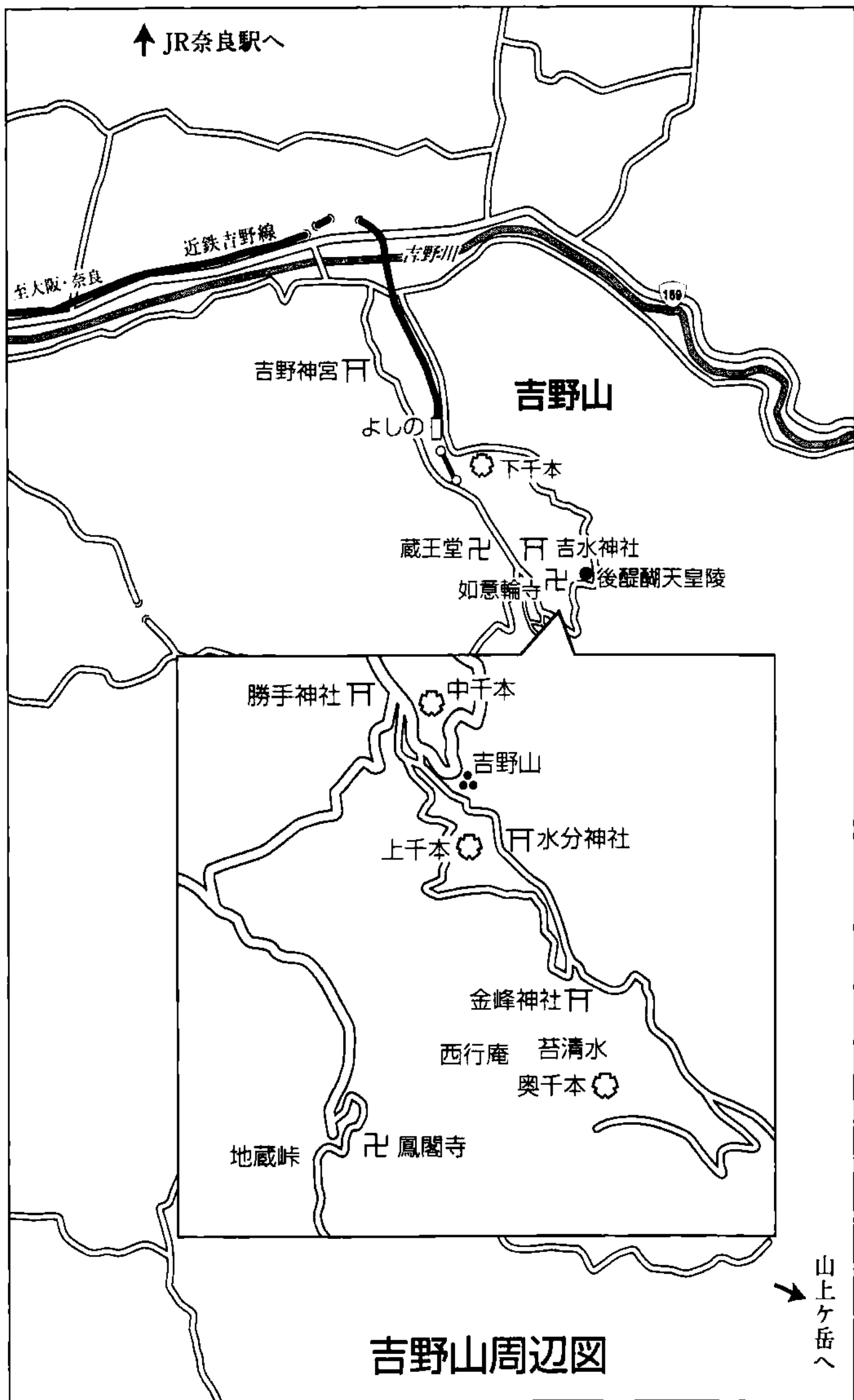
徳間書店

TOKUMA NOVELS













1

十月十三日、高曇り、微風。

鹿島秀介かしましゅうけいと大仁直孝おおひとなおたかは、北アルプス・蝶ヶ岳ちようけと

常念岳じょうねんの中間にあたる西斜面を下つて森林帯に入

った。縦走路は稜線につけられているが、二人はあ  
る目的をもつて、薄暗い森林の斜面を這はうようにし  
て歩いた。急な窪くぼみがあつたり、木の根につまづい  
て、二人は何度か尻餅をついたりしていたが、アク  
シデントが起こった。

大仁が転んだ拍子に足をひねった。「痛い」と叫  
んで倒れると起きあがれず、右膝みぎひざを両手で押さえて  
顔をゆがめた。

六、七メートル先を歩いていた鹿島は振り返り、

「大丈夫か？」といつて木の根を掴つかんだ。大仁のよ  
うすをじつと見ていたが、彼は苦痛で立ち上がれな  
いようだった。

鹿島は大仁に近寄った。

「ダメだ。折れたらしい」

大仁は苦しげにいった。

鹿島は手が出せなかった。

大仁は右足を痙攣けいれんさせた。

鹿島は、これはおおごとだと思った。「しまった」  
と舌打ちするところだった。一人が怪我けがをすると山  
行はそこで打ち切りだ。計画はすべて台なしになり、  
大きな荷物を背負い込むことになる。

鹿島はしばらく大仁のようすをみることにした。

大仁はときどき鹿島に顔を向けた。「すまない」  
といっているようでもあり、「なんとかしてくれ」  
と訴えているようでもあった。

二十分ほどたった。午前十一時である。

鹿島は付近に落ちている折れた枝を拾った。それを大仁の右膝に当て、ズボンの上から包帯を巻いた。

「痛むか？」

「痛い」

大仁は白い包帯の上を押さえた。

この森林の中で、大仁の足の痛みの遠のくのを待つわけにはいかなかった。樹間から空を仰ぐと、なんだか雪が舞ってきそうに見えた。

二人はザックを木の根元に置いた。鹿島は大仁の肩を抱いた。大仁は鹿島よりひとまわり大きい。体重は七〇キロ近くある。

斜面をゆっくり登った。鹿島がよろけて両膝を突くことがあった。約二十分を要してなんとか稜線に登り着くことができた。大仁の額は光っていた。冷や汗がにじんでいるのだった。

鹿島は大仁を奇怪なかたちの岩に寄りかからせ、ザックを取りに斜面を下りた。自分のを背負い、大

仁のザックを抱えて、稜線にもどった。顔にも背中にも汗が流れた。

鹿島には大仁の肩を抱えて最寄りの山小屋まで歩く自信はなかった。

万が一の場合の用意にザックに入れてきたツエルトを出して張った。大仁にはダウンジャケットを着せた。毛糸の帽子をかぶせ、マフラーを首に巻いてやった。

「首だけ出してろ。通りかかった者がいたら、同行者のおれが常念小屋へ行ったといえ。三、四人のパ―ティーだったら、かついで山小屋へ連れて行ってくれと頼めよ」

鹿島は、「頑張れ」と大仁の肩を叩いた。荷物を半分ににして北を向いた。一刻も早く山小屋に着きたいからだった。

鹿島が常念小屋に着いたのは、午後一時十分。同行者が足を折るかひねるかして、動けなくなったの

で、手を貸してもらいたいと頼んだ。怪我人は縦走路に張ったツエルトに寝かせてある。そこまでは片道一時間ぐらいだと説明した。

さいわい山小屋には若い登山者が三人いた。少し前に到着したところらしかった。

山小屋の従業員が担架を出した。三人の若い登山者は怪我人の救助に協力するといった。

鹿島が先頭に立ち、五人は南へ向かった。ツエルトの中の大仁は寒さに震えていることだろうと思つた。鹿島と大仁は山小屋利用の山行だったから、コンロや燃料は携行しなかった。ツエルトは、急な雨に遭つて動けなくなった場合の用意だった。いままでの山行でそれを使つたのは一度しかなかった。今回、怪我をした同行者のためにツエルトを使うことなど考えてもみなかった。

灰色の空から薄陽が差した。山全体が明るく見えた。大仁の怪我が快方に向かっているように感じら

れた。

午後二時十五分ごろ、鹿島の張った黄色のツエルトが黒い岩の陰に見えた。その間、一人の登山者にも出会わなかった。穂高や槍とは異なつて、この稜線を歩く登山者はごく少ないのだ。

「大仁。着いたぞ」

鹿島はツエルトに大声で呼びかけた。

応答がなかった。黄色の薄布が微風にわずかな波をつくつた。中で大仁が動いたように見えた。が、彼は顔をのぞかせなかった。

鹿島はもう一度大仁を呼んでから、ツエルトのフアスナーを下ろした。

紺色のダウンジャケットを着た大仁がうつ伏せになっていた。黄色い毛糸の帽子を脱いでいた。彼は動かなかった。

鹿島は目をこすつた。夢を見ているような気がしたからだ。足をひねるか骨折しただけの大仁が倒れ

ていて動かない。二時間あまりのあいだに彼の容態は急変したのだろうか。右足をひねっただけでなくて、頭でも打っていたのだろうか。

「大仁」

鹿島はファスナーを全開し、膝を突いた。その瞬間、彼は、「わっ」と叫んだ。のけ反<sup>さか</sup>って後ろに立っている四人の顔を仰いだ。

四人は姿勢を低くしてツエルトの中をのぞいた。

「頭から血が……」

一人がいった。

「足を怪我したんじゃないじゃないですか」

べつの男がいった。

鹿島は気を取り直し、地面に両手を突いて、大仁の頭に目を近づけた。

大仁は血だまりの中に顔をうつ伏せているのだった。

鹿島は大仁に呼びかけ、ダウンジャケットの肩を

恐る恐る揺すった。大仁はものをいわないし、なんの反応もしなかった。

死んでいるのは確実だった。

「なぜだ？」

鹿島は這ってあとじさりした。「大仁は、足をひねって、動けなくなったただけでした」

彼は四人にいった。

「警察に届けなくては」

山小屋の従業員がいった。三人の登山者はうなずいた。

鹿島はどうしてよいかわからなかった。「落着け」と自分にいって、胸を撫<sup>な</sup>でた。

四人の男たちは、ほそほそと話し合っていたが、とにかく山小屋へ引き返すといった。

「ぼくが、ぼくが警察に連絡します」

鹿島はいうと、ツエルトのファスナーを上げた。

四人の男たちは、担架をかついで歩きはじめてい

た。鹿島は彼らのあとを追った。四人の足は鹿島から逃げるように速かった。

また薄陽が当たった。鹿島は小石を蹴<sup>け</sup>って膝を突いた。手を合わせ、「いったいなにがあつたんだ？」と、天にきいた。

こんなことになるのなら、二人で西面を這いまわるのではなかった。苦い後悔の思いがこみあげた。

## 2

長野県警<sup>とよしな</sup>豊科署は、登山者がツエルト内で頭から血を流して死んでいるという通報を、常念小屋から受けた。午後三時二十五分だった。

ヘリコプターを使って現場に着きたいが、日没にならないかを話し合った。はたして通報どおりであるかだけでも確かめる必要があるということになり、県警本部に急報した。

ヘリには刑事と鑑識係と山岳遭難救助隊員が乗った。

穂高や槍や常念の頂稜に西陽が当たっているうちに、ヘリは常念岳南側稜線上の黄色いツエルトを認めて降下した。



へりに同乗してきた刑事は道原<sup>みちはら</sup>と伏見<sup>ふしみ</sup>である。

まず鑑識係がツエルトのファスナーを裂いた。男が出入口に頭を向けてうつ伏せになっていた。男は黄色の毛糸の帽子に左手をのせていた。通報どおり、男の頭からは血が流れている。頭にライトを当てた。鈍器で殴られたようだ、と鑑識係がいった。ツエルトの中に凶器は見当たらなかった。

北のほうから病人のような足取りでやや角ばった顔の男が近づいてくると、道原たちを見て頭を下げた。

その男は、さつき山小屋から電話した者だといひ、鹿島秀介だと名乗った。彼は砂礫<sup>されき</sup>にしゃがみ込んだ。「ツエルトの中で血を流しているのは、あなたの同行者ですね？」

道原がきいた。

「そうです。大仁直孝です」

鹿島は中身が半分ぐらいしか入っていないザツク

から腕を抜いた。

ツエルト内と周囲の撮影がすんだ。日没が近づいた。救助隊員が遺体を毛布に包んでロープをかけた。解剖のために松本市内の大学の法医学教室へへりで搬送することにした。

へりが風を起こして遺体を吊り上げると暗くなった。

ツエルトを撤収した。次にやってきたへりに、刑事らの一行は乗り、鹿島を同乗させた。

署に着くと、鹿島からきいた大仁の自宅に急を知らせることにした。道原が電話をかけた。妻が応じた。彼は大仁が死亡したといわず、怪我をして重態だといった。妻は絶句したが、関係者に連絡して、なるべく早くそちらへ向かうといった。

「一緒に登った鹿島さんは、怪我をしていないんですか？」

妻はきいた。

「いま署にきてもらっています。怪我はしていません」

妻は気丈な人らしく、手数をかけたと礼をいった。

道原は自分の席から、ソファにかけさせた鹿島のようにすを観察した。鹿島は同行者を失ったショックからか、目を瞑<sup>つむ</sup>って首を垂れていた。

伏見が、食事をするかと鹿島にきいた。鹿島は首を横に振った。いまは食事が喉<sup>のど</sup>をとおらないといっているようだった。

若い刑事がお茶を出した。鹿島は一礼して、深呼吸するように背筋を伸ばすと、お茶を飲んだ。

道原は、鹿島が落着いてきたのを見はからって正面に腰かけた。すぐに伏見が道原の横にすわった。

大仁直孝の年齢をきいた。三十九歳で、鹿島も同い年だといった。

「あなたと大仁さんは、どういう間柄ですか？」

「高校で同級生でした。以来ずっと親しくしていました」

鹿島は高校卒業後すぐに就職したが、大仁は大学に進んだという。

大仁は父が経営している化学薬品会社に勤務して、営業を担当していたという。さつき彼の妻が、関係者に連絡したうえでそちらに向かうといったのは、父が会社に知らせるつもりだったのだろう。

「あなたと大仁さんは、いつごろから山登りをしていましたか？」

「私が高校を出て二年ぐらいしてからです。大仁は大学に通っていました」

「そのころから毎年登っていましたか？」

「初めのうちは年に一回程度でしたが、彼が大学を出てから、年に二回は登るようになりました」

「夏か秋ですか？」

「七月か、九月か十月のおたがいに都合のいい日を

話し合つて、登っていました」

「今回の登山の日程はどうなっていましたか？」

「きのうの朝、列車で東京を出発して午後、横尾に着きました」

「幕営ですか？」

「横尾山荘に泊まりました。今夜は常念小屋に泊まり、あした豊科経由で帰る計画でした」

「けさは何時に横尾山荘を出発しましたか？」

「四時です」

「早いですね」

「はい。ゆつくり登ろうということで、早く出ました」

道原は椅子を立ち、伏見を呼んだ。横尾山荘へ電話して、午前四時ごろ出発した男の二人連れがいたかを確認するようにいつけた。

道原はソファにもどった。

鹿島は、タバコを吸つていいかときいた。

「どうぞ」

道原は灰皿を鹿島の前へ置いた。

伏見が別室からもどってきた。

道原は伏見の報告をきくために椅子を立った。

けさ、二食分の弁当を持って発った宿泊者が二組いた。鹿島と大仁はそのうちの二組だろうと横尾山荘では答えた。昨夜のうちに二食分の弁当を注文しておき、それを持って早朝出発したのだという。

伏見は、鹿島と大仁を記憶しているかときいたところ、顔を見れば思い出すだろうが、どんな人たちだったかは覚えていないといったという。横尾山荘の昨夜の客数は二十一人だった。

道原と伏見は、鹿島のいった「午前四時出発」を、たがいのノートに控えてソファにもどった。

「横尾から常念へ登ったのは初めてですか？」

「二回目でした」

「最初は、いつでしたか？」

